

#### 4) サンシュユとゴシュユ=山茱萸と呉茱萸

サンシュユはミズキ科の落葉小高木で、中国、朝鮮半島が原産である。高さは5~10mになり、葉は長卵形で対生し、長さ5~10cm、先端は長く尖り基部は楔形となる。春、芽だしとともに葉に先がけて4弁の小花を密集して咲かせ、**散形花序**をつくる。果実は長楕円形の核果で、9月中旬ごろ紅熟し、中には堅い核がある。茱萸とはグミのことで、果実の形がグミに似ているために名付けられたのだろう(02-05-12 グミの項参照)。和名の由来は中国名の山茱萸をそのまま音読したもので、別称としてハルコガネバナ、カリハノミ、アキサンゴ、イタチハジカミなどと呼ぶ地方もある。学名は『*Cornus officinalis*』で、属名は「cornu=角」に由来し、材が堅いことを、また種小辞は「薬効のある」という意味である。イギリスでは『*Japanese cornel cherry*』といい、中国では『春野桂』と呼ばれ、山茱萸はこれとは別の植物とされてきたが、現在では日本のサンシュユも中国のサンシュユも同一である。

サンシュユが日本に渡来したのは1722年(享保7年)のことで、朝鮮から幕府の小石川御薬園に播種されて広まったと伝えられている。今ではレンギョウとともに日本の春を代表する黄色の花である。果実は秋早く、葉が色づく前に紅熟してよく目立つ。リンゴ酸や酒石酸などを多く含み、漢方では果実を乾燥させたものを『山茱萸』と呼び、煎じて、収斂、強壯、解熱、腰痛、耳鳴り、糖尿病、遺精、インポテンツ、前立腺肥大、動脈硬化などに良いとされている。一般家庭では果実酒にするのがよく、種子を除いて乾燥させたもの200グラムに同量の砂糖を焼酎1.8リットルに漬け込んで、2~3ヶ月冷暗所で保存すれば完成である。中高年や老人の足腰の冷え、腰痛、のどの乾き、さらに排尿回数が多く残尿感がある症状などに効果がある。

一方ゴシュユはミカン科の落葉小低木で、同じく中国が原産である。葉は対生し長さは10cmほどの**奇数羽状複葉**で、夏、緑白色の小花を円錐状に多数つけ、秋には紫紅色に熟す。和名の由来は呉茱萸の音読みである。学名は『*Evodia rutaecarpa*』で、属名は良い香を意味し、種小辞はヘンルーダ属のような果実という意味である。しかし**雌雄異株**で日本に渡来したのは雌花のみで、結実しない。漢方では未熟果を乾燥させたものを『呉茱萸』と呼び、健胃、駆風、利尿、頭痛、嘔吐に用いる。果実や枝葉には身体を温める効果があり、浴湯料としても用いられる。中国に伝わる話では方術(ホウジュツ=不老不死の術や占い、医薬などを行なう術で漢方の方である)の修行をしていた桓景(カンケイ)は、師である費長房(ヒチョウボウ)に「今度の九月九日に、お前の郷里では大災厄が起こるから、家人に赤い袋を縫はせて、その袋の中に呉茱萸を入れて、これを臂(ヒジ)に掛けて山に登り、菊花の酒を飲めば、災厄を必ず避けることが出来るだろう」と予言され、桓景はその通りにして災厄を免れることができたと言う。サンシュユと同じ頃に日本に渡来し、薬用として小石川御薬園で栽培され、サンシュユと共に広まった。この2種は名前ばかりでなく日本での生い立ちもよく似ている。



サンシュユの花は、レンギョウ、土佐ミズキ、そしてナノハナとともに、春を黄色に彩る花の代表格である。別名のハルコガネバナは分かりやすい呼称である(東京都新宿区新宿御苑)。



鈴なりになったサンシュユの果実、アキサンゴと呼ばれる所以でもある(東京都新宿御苑)。



ラグビーボール状のサンシュユの果実は止血、解熱作用があり、強壮剤として、また腰痛、糖尿病などの薬として山茱萸(ヤクガミ)という生薬名で日本薬局方にも収録されている。



昨秋に実った果実と、新しい花が同居することもある（埼玉県深谷市）。



新宿御苑の西側、千駄ヶ谷門付近には大きなサンシュユの木が多い。この他にもレンギョウやトサミズキなど、新宿御苑の早春は黄色の花で満たされる(東京都新宿区)。



サンシュユの咲く頃、山野ではよく似た黄色の花が咲く。ダンコウバイである(長野県軽井沢町)。



ダンコウバイの学名は『*Lindera obtusiloba*』で、属名はスウェーデンの植物学者J.リンデルに因む。クスノキ科の落葉低木で、枝を折ると芳香を放つため『檀香梅』と記し、爪楊枝などにする。



ゴシュユの熟した果実。雌雄異株で日本では雄株は珍しい(小平市薬用植物園)。



ここで取り上げた3種類は、分類的には関連性はない。ただサンシュユとゴシュユは名前もさることながら、その生い立ちがよく似ており、ここで取り上げることにした。

[目次に戻る](#)